

# 「新しい福音主義」の 聖書理解とその実態

The Biblical Understanding of  
Neo-Evangelicals and Its Reality

青木 保憲  
Yasunori Aoki

キーワード

「新しい福音主義」、根本主義、聖書無謬、『聖書のための戦い』、福音派

KEY WORDS

Neo-Evangelicals, fundamentalism, biblical inerrancy, “The Battle for the Bible,” evangelicals.

要旨

1940年代から始まった「新しい福音主義」は、ビリーグラハムの活躍と相俟って発展していく。しかし彼らに分裂をもたらしたのが「聖書理解」の問題であった。「新しい福音主義」を立ち上げたH. オッケンガやH. リンゼルは、「聖書は無謬である」という主張に基づいて、聖書が真実を語っているとする世界を生み出そうとした。しかし次の世代であるD. ハバード、ダニエル・フラー、そしてP. ジェウエットは、聖書の権威を守りつつも、社会に適応する神学を構築するために高等批評を受け入れていくのであった。

前者は「新しい福音主義」の第一世代であり、社会に「歩み寄ろう」とした世代である。そして後者は、実際に一步「歩み寄った」世代ということになる。当時は、この両方が混在していたのである。

SUMMARY

In the late 1940s, “Neo-Evangelicals” were expanding with the fine showings at events by Billy Graham. But they were divided by the problem of “biblical

inerrancy.” The founders of “Neo-Evangelism,” H. Ockenga and H. Lindsell, tried to bring out the vision of the world in which the Bible told the truth based upon the assertion “the Bible has inerrancy.” But by the next generation, movement leaders like D. Hubbard, D. Fuller and P. Jewett accepted the pressing criticism that they needed to build socially adapted theology even while protecting biblical authority. The former was the first generation of “Neo-Evangelicals,” who “tried to” compromise with the world around them. The latter was the second generation, who in fact did “compromise.” However, both viewpoints were actually mixed into each generation.

## 1. はじめに

筆者はペンテコステ派のキリスト教会で生まれ育ち、現在、牧師として活動している。出会ったキリスト教が、福音主義、特に聖書理解においては逐語靈感無謬説を標榜していたため、その教えを真正面から「真理」として受け止めて歩んできた。しかしその教理の堅苦しさに疑問を感じ始め、次第にキリスト教信仰から外れていくこととなる。やがて幅広い「神学」に触れ、いわゆる「リベラル神学」を学ぶにつれ、キリスト教信仰の開放性を味わうこととなり、現在に至っている。同じような堅苦しきから脱却しようと志した「新しい福音主義」に筆者は親近感を覚えた。これが本研究に取り組もうと考えたきっかけである。

## 2. 本研究のねらい

進化論と聖書の高等批評に代表される近代主義（モダニスト）に反対してきた根本主義の考え方を打破しようとして、1940年代に「新しい福音主義」を標榜する一派が台頭してきた。本論文は、彼らの考え方を詳らかにすると同時に、「新しい福音主義」の運動は何をもたらしたのかを考察することを目的としている。実はこの過程を経ることで、Evangelicals 全体をつかむための一定の方向性を得ることができると確信している。

## 3. 「新しい福音主義」とは何か

19世紀のプリンストン神学に代表される福音主義の活況を再び取り戻そうとする彼

らは、聖書の高等批評や進化論に異を唱え、頑なになってしまった「根本主義」と自らを区分して、「福音主義」者と位置づける。<sup>1</sup>そして根本主義以前の時代を復活させるべく、「新しい (new)」という冠をつけた。これが「新しい福音主義」である。<sup>2</sup>

「新しい福音主義」という表現を用いたのは、ハロルド・オッケンガ (Harold Ockenga) である。1948年パサディナの市民公会堂で開催された会議で提示された。それまでの歩みは以下の通りである。<sup>3</sup>

1942年…保守的な聖書理解を持たない連邦教会協議会 (Federal Council of Churches) に対抗して、エルウィン・ライト (Elwin Wright) とオッケンガが中心になり、全米福音協会 (National Association of Evangelicals) を設立する。

モットーは「妥協ではなく協調で (cooperation without compromise)」。

1944-45年…オッケンガが各地を回り、神学者たちとミーティングを重ねる。

1947年…フラー神学校が設立される。初代学長にオッケンガが就任する。

1948年…パサディナの会議で「新しい福音主義」を提唱する。

彼らの主張は次の3つにまとめられる。

#### ①「ディスペンセーションナリズム」からの脱却

根本主義者の頑なさを象徴するものが、「ディスペンセーションナリズム」であった。<sup>4</sup>「新しい福音主義」は、これを捨て去り、好戦的な今までのあり方を是正しようとしたのである。歴史的に見るなら、「ディスペンセーションナリズム—特にジョン・ダービー (John N. Darby) が伝えた前千年王国説—」は、ドワイト・ムーディー (Dwight L. Moody) に受け止められ、ナイアガラカンファレンス (1883-1897) を通して人々に浸透していったのである。そして聖書批評学との戦いのためにプリンストン神学と手を組むという流れであった。つまり20世紀半ばでの「ディスペンセーションナリズム」の放棄は、福音主義にあらかじめ内在していたものへの復帰であったとも言えるのである。<sup>5</sup>

#### ②社会的問題の改善と解決を求める方向性

特に本論文で注目したいのは、この項目である。オッケンガと共に「新しい福音主義」の一翼を担ったカール・ヘンリー (Carl Henry) は、1940年代後半の社会問題を厭わずに扱い、信仰を社会に適応 (application) させていくという姿勢を表明している。<sup>6</sup>

これはその後の「新しい福音主義」の流れを評価する上において、大切な観点とな

る。

### ③知的挑戦—『クリスチャニティ・トゥデイ』の発刊

「新しい福音主義」たちは、フラー神学校で同僚となったウィルバー・スミス (Wilbur Smith) がビリー・グラハム (Billy Graham) と親交があったことを機に、グラハムとの距離を縮めていく。そして1956年、高まってきた「新しい福音主義」への期待に対して具体的な形で応えようと、『クリスチャニティ・トゥデイ (*Christianity Today*)』を発刊することになる。これはグラハムが中心となり、福音主義陣営をまとめ上げようとした働きとも言える。そして、当時「根本主義」と認識され、反知性主義と捉えられていた福音主義陣営のイメージを一新しようとする試みでもあった。<sup>7</sup>

## 4. 聖書理解を巡る分裂

意気揚々と船出した「新しい福音主義」であったが、やがて大きな分岐点にさしかかる。それが1962年12月3日に行われたフラー神学校の全体会議であった。これは「黒い土曜日」事件と称された。

フラー神学校の三代目学長候補として、卒業生のデビッド・ハバード (David A. Hubbard) の名が挙げられていたことに端を発する。彼の聖書理解を巡って、フラー内部が、そして「新しい福音主義」内部が二分されてしまったのである。ハバードは、ウェストモント大学で旧約学を教えており、そのシラバスに従来の聖書理解 (無謬であり、全き神の言葉) を否定する文言が表記されていた。「聖書の神学的、霊的な部分は総合的に信頼できるが、歴史的、科学的には全く間違いがないと言い切れるものではない」という旨の記述であった。<sup>8</sup>

時あたかも1952年に発刊された改訂版標準聖書 (RSV) を採択するか、従来の欽定訳 (KJV) をそのまま用いるかで、福音主義陣営が揺れていた最中であったため、フラー教授陣、さらに理事会全員 (そのほとんどが「新しい福音主義」) が自らの聖書理解をどう表明するか、という問いを突きつけられたに等しい状況が生まれてしまったのである。

福音主義研究の第一人者、ジョージ・マースデン (George M. Marsden) は、彼らを保守的新福音主義者 (conservative Neo-Evangelicalism) と進歩的新福音主義 (progressive Neo-Evangelicalism) として切り分ける。<sup>9</sup>しかしマースデンの「保守的」「進歩的」という名称では、対立的概念と誤解されてしまう可能性があるため、ここでは、前者を「新しい福音主義」の「第一世代」、後者を「第二世代」と呼ぶこ

とにする。<sup>10</sup>

## 5. 「新しい福音主義」の「第一世代」

「新しい福音主義」の「第一世代」とは、具体的にハロルド・オッケンガ、エドワード・カーネル（Edward Carnell）らを指す。年齢的にはカール・ヘンリーもこの世代だが、彼は40年代後半から社会活動に関心を示し、後にフェミニズム運動などに一定の理解を示すようになっていく。そういった意味では、第一世代から第二世代への橋渡しの存在を担っていたと言えよう。<sup>11</sup>

彼らの中心は、1948年のパサディナでの会議に出席した人々であり、同時にプリンストン神学校時代のジョン・メーチェン（John Gresham Machen）の同僚、教え子たちである。

特に今回は、ハロルド・リンゼル（Harold Lindsell）の著作『聖書のための戦い（*The Battle for The Bible : Defending the Inerrancy of Scripture*）』を中心に提起し、彼らの聖書理解に迫ってみたい。この著作は、高等批評に対して聖書の無謬を守ろうとして書かれたものではない。むしろ福音主義でありながら、高等批評を受け入れようとする立場を表明した「新しい福音主義」たち（ここで言う「第二世代」）に対して戦いを挑んでいるのである。<sup>12</sup>

「聖書に関して吹き荒れている戦いの中心的な問いは無謬性にある。それは、聖書はすべて信頼がおけるものか、それとも部分的に信頼できるものかという問いである。」<sup>13</sup>

彼らに関して、特筆すべき点は、次の2つである。

- ①「寛容さ」という縛りの中で、好戦的なイメージを払拭する形で聖書の無謬性を主張しようとしている。

この寛容さの縛りを最も感じるのは、次の二箇所の対比である。

「私はこの考え（聖書は無謬である）に同意しない人たちを非難しようとは思っていない。私はこの事柄を、論争的ではなくむしろ平和的に取り扱いたいのだ」<sup>14</sup>

「しかし同時にそんな否定的な導きでは、大変深刻な落とし穴が将来待ち受けているであろうこともまた真実である。たとえ今の世代が無謬性を主張せずに多少なりとも福音主義者でいられたとしても、その後の世代がそうならないことは、歴史が証明するであろう。私たちは、ボーンアゲインしていない今の人たちに対してと同様に、次の世代にも責任があるのである。」<sup>15</sup>

論争はしたくない、非難もしたくないと言いつつも、詰まるところ高等批評を受け入れている第二世代の主張を完全に否定している点である。

このような縛りは随所に見られる。リンゼルだけでなく、彼と共にウィルバー・スマイスに捧げる著作集『福音主義の根源 (*Evangelical Roots*)』を編集し、自らも投稿しているケネス・カンツァー (Kenneth S. Kantzer) は、開かれた公開討論を提案し、以前のような反知性的なレッテルに退いてはいけなさと主張している。最後に彼は次のように述べている。

「愛を持ってリベラル派と対話し、対談しようではないか。もし彼らに対する私たちの愛が対談を通して輝き出さないなら、私たちはペンを捨てるべきである。(中略) 私たちは正直さ—それは財政面と同様に知的な面にも霊的な面にも—を覚えておくべきである。それだけが唯一の正しさだから。」<sup>16</sup>

このような表現は、かつての根本主義では考えられないものであろう。しかし、その本質は変わっていないといわざるを得ない。つまり外部 (高等批評) に対しては、根本主義との訣別をアピールするために友好的・寛容な一面を見せるが、内部 (第二世代) に対しては、婉曲的な表現を用いつつも、かなり辛辣である。

②絶対真理が存在し、それは聖書そのものであり、これに基づいた神学が世界を規定するという前提に立っている。

リンゼルは聖書の無謬を疑うことに対して、ハリー・フォスディック (Harry Emerson Fosdick) の著作に言及して、次のように述べている。

「彼 (フォスディック) は、聖書の中に他にはない信じるべきものがあると述べている。しかしどんな基準を用いようとも、彼らは聖書以外のものを用いて、聖書を判断しようとしてきたのであって、決して聖書でそれらを判断しようとはしなかった」<sup>17</sup> さらに次のようにも述べている。

「聖書はあらゆるもの—神学、哲学、科学その他のいかなる分野—の上に立ちほだかっているのである」<sup>18</sup>

これはすべてを判断する基準として聖書を設定し、その前提から物事を判断するという姿勢がうかがえる。リンゼルはさらに、聖書で判断する場合にどこに着目するかについて次のように述べる。

「無謬性を扱う際、私たちが絶対に避けなければならない落とし穴がある。それは相手の現実生活から善悪を判断しないということである。もちろん人が信じていることとその人の現実生活とは幾ばくかの連関があるだろう。しかし聖書の言葉そのものは、私たちにそういったやり方をしないことを教えてくれる。(中略) 私は聖書に誤りがあると信じるのがふしだらな生活につながるということを証明したい

のではない。確かにこのことは、聖書には誤りがあると信じている福音主義者の現実生活が証明していると言えよう。しかし私が注目するのは、聖書は誤っていると信じている人の神学的観点であって、その人の生活実態を扱いたくはないのである。」<sup>19</sup>

ここでリンゼルに代表される第一世代が「聖書は誤りが無い」と語る場合の視点(神学)が明らかになった。彼らはマースデンが言及しているように、19世紀の「オールド・プリンストン」の活況を学問的に取り戻そうとしてNeoをEvangelicalismの上に冠した。プリンストン神学の特徴は「聖書の無謬性や真理性を理性的・実証的な方法で考えた」ということであり、「その方法を聖書そのものの中に求め」るところにある。<sup>20</sup>

これはあくまでも神学的な思索として聖書を捉えたのであるが、その伝統をそのまま受け継いだのが「新しい福音主義」の第一世代だということができる。これは「聖書は真理である。なぜなら聖書がそう語っているからである」という回文にも似た循環の中に陥ってしまうことになる。まず「聖書の無謬性・無誤性」という視点(神学)から世界を解釈するというあり方は、高等批評などのアプローチとは全く正反対である。

ヘンリーやオッケンガが「信仰を現実世界に適応させていく」という目的で提唱したのが「新しい福音主義」であったが、その現実的な適応は、現実世界とすり合わせる中で導き出される神学を構築するという方向ではなく、自分たちの神学的視点を社会的な分野にまで拡大し、社会を変えていこうとするものになっていったということを示している。

実際に今でもこの方向性が健在であるとジョン・スタックハウス(John G. Stackhouse)は述べ、端的に「わたしたちがXを信じられるのは、聖書のここにそのことが書いてあるからだ」という典型的な教義があると指摘している。<sup>21</sup>

マースデンは80年代以降の根本主義者を「何かに怒っている福音主義者」と評したが、この定義を援用するなら、「新しい福音主義」の第一世代は「怒りを抱えつつも寛容さを持つと努めている根本主義者」ということができるのではないかと。<sup>22</sup>

## 6. 「新しい福音主義」の「第二世代」

「新しい福音主義」の第二世代とは、具体的にデビッド・ハバード(David Hubbard)、ダニエル・フラー(Daniel Fuller)、そしてポール・ジェウェット(Paul Jewett)である。ここではハバードの『旧約聖書概観－旧約聖書からのメッセージとその背景』(*Old Testament Survey: The Message, From, and Background of The Old*

Testament)』、フラーの『聖書の統一性 (The Unity of the Bible)』、ジェウエットの『神、創造、そして啓示 新しい福音主義の神学 (God, Creation, and Revelation : a Neo-Evangelical Theology)』を取り上げて、第二世代の特徴、特に第一世代からの推移を考察してみたい。

①聖書を「解釈」する視点を自覚的に持っている。

ハバードは旧約学を専門としており、次のように述べている。

「説教や教えの中心はキリスト自身が為したように旧約聖書を再解釈することである」<sup>23</sup>

「使徒である聖書記者は、時々引用箇所解釈的要素を織り込むように次第になってきた。これらの注釈は独断や気まぐれで為してはならず、テキストを無批判的に直解したり、でたらめに意味を改変するような解釈で説明することと切り分けねばならない」<sup>24</sup>

フラーは、ハバードの解釈の仕方をさらに敷衍して、「聖書（旧・新）の統一性」を次のように主張する。

「聖書は靈感を受けた言葉であり、誤りなき神の言葉である。私は聖書に書かれている事柄 (facts) とそこに存在する原理 (axioms) を用い始めて、やっとこの結論 (統一性) にたどり着き、これらを用いて聖書が確かなものであると教えるようになった。」<sup>25</sup>

フラーの場合、父チャールズが創設したフラー神学校開校当時 (1947年) にウィルバー・スミスから聖書についての教えを受けたが、彼は「論理的にしっくりいかないものを感じていた」と述べている。1957年に北バプテスト神学校 (Northern Baptist Seminary) で旧約聖書に関する論文を書くが、ここでもスコフィールド引照付聖書の立場に消化不良を感じている。やがて彼は1960年代半ば、つまりフラー神学校内がハバードを中心にして大きく舵を切る段階になって、上記のような気持になっているのである。フラーが、第一世代の聖書理解を思わしくないと感じていたことがこのことからわかる。

ジェウエットの場合は組織神学を専門としているが、次のように述べている。

「我々が論じている聖書の言葉は、キリストの出来事において統一されるという信仰の法則を見出す。この (キリストの) 出来事は、旧約を完成させる新約聖書という視点で解釈されており、直解的 (literally) ではなく、類比的 (analogically) に捉えられるものである。」<sup>26</sup>

ここでは三人とも、聖書を「解釈」という発想が前面に出ていることに注目したい。ハバードはあからさまに「無批判的な直解主義 (slavish literalism)」と表現し



て、従来の聖書解釈を断じている。フラーは「聖書に書かれている事柄 (facts) とそこに存在する原理 (axioms)」と語り、書かれた事柄をリテラルに捉えてはいない。ジェウエットは、キリストの出来事そのものも旧約との関わりで類比的解釈を施さなければならないと語っている。

さらにハバードは、『ティンデル聖書注解 ヨエル書・アモス書』の中では、高等批評に対して、寛容な姿勢を見せている。

「各旧約聖書の成り立ちの研究は注意深くしなければならないが、そのことは、われわれが伝統的著者名を一冊の書のすべての言葉の作者とするような絶対主義者にならねばならないということの意味するのではないのである。」<sup>27</sup>

高等批評を受け入れるという立場では、ジェウエットの方がもう少し積極的である。

「聖書の言葉に関する批評学、歴史学のお陰で、多くの聖書作者の作風に違いがあることが明らかになり、聖書が啓示されたことを書き取っただけということとは言えなくなってきた。それゆえ、長い間、聖書と言えば無謬であると語られてきたが、この関係は速やかに切り離され、終えることになるだろう。」<sup>28</sup>

その一方で彼らは、各々の視点から従来の聖書観（聖書は神の言葉である）を大切にすることを語っている。しかしこれは第一世代の言い方とは異なり、下記のような言い回しとなっている。例えばハバードは高等批評の危うさも指摘し、聖書本文をそのまま読むことを強く提示する。

「われわれの現在の知識の状態では、編集の過程がたどった経過を明確に詳細に再校正しても、多くの部分は推測に過ぎないとせざるをえない。(中略) われわれが手にしているのは、見事に織られた布のような作品であり、神の民は時代を超えてこれに固着し、ここから警告、慰め、教えを得てきたのである。本注解書の方法は、本文をあるがままに見て、全体の見通しからその意味の収穫を集めようとするものである。」<sup>29</sup>

これらの引用からわかるように、ハバードは聖書を「そのまま読む」ことで、その本質をつかもうとしているのである。そのためにギリシャ語やヘブライ語などの原典に当たることも厭わないし、高等批評の成果も否定しない。聖書全体の無謬性から離れ、イエスが解釈した視点で聖書を見ることを提唱している。

一方フラーは、使徒言行録20章17から35節までを論拠に、「神の計画のすべて (the purpose of God)」が聖書を貫いていると語っている。<sup>30</sup>

ジェウエットは、聖書を書いた具体的な作者がおり、同時に聖書が神の言葉であると言い得る根拠を「神の霊 (the Spirit of God)」に置いて、次のように提示する。<sup>31</sup>

「この点に関しては、聖書が神の言葉であるという意味は、教会で教えられている

ように、神の霊が特別に働いているということである。私たちの心に聖書の真実性を与える霊は、同じように聖書を著した作者をも導くものなのである。」

聖書を人が書いた書物として認める点は第二世代の特徴を表わしているが、同時に神の霊によって聖書を神の言葉と位置づけているところは、ジェウエットもまた福音主義の一人だということになる。

従来の聖書そのものをそのまま受け止めるという直解的なあり方から、様々な条件を付けつつではあるが、聖書を「解釈」して読むべきであるとストレートに提示した点は、第二世代の新たな一歩であると評価することが出来よう。

②その時代に生きる人々が、現実生活と共有できる「神学」を構築しようとしている。

「新しい福音主義」第一世代が、聖書の無謬性という神学的視点で世界を解釈したのに対し、ハバードは聖書と現実世界との関係を次のように述べている。

「現代の読者も旧約聖書の言葉を自分に引き付けて見ようとしなければならない。読者は『旧約聖書の作者は私たちの時代に何を言いたいのか?』と問わなければならない。」

そうすることで、聖書の言葉の意味が十分読者の信仰と生活に反映されるとハバードは締めくくっているのである。<sup>32</sup>

さらに高等批評に関しては、「聖書の時代を生きた人々は、彼らの現実を生きた人々であり、神からの啓示を受け止めて生きたというよりも、各々の人生に目的を持っていた人々である」という前提に立って読み解こうとしている。神の民を他の異邦人たちの間に生きた相対的な存在と捉え、「聖書の記述そのものは、古代中近東の歴史や地理、そして宗教や文化を無視するようなものではない」として、考古学的な資料やヘブライ語もふんだんに用いつつ、旧約聖書を概観しているのである。<sup>33</sup>

ハバードはカーネルの後を継ぎ、学長となり、フラーと共にフラー神学校の改革に取り組んだ。具体的には、ドナルド・マクギャバン (Donald McGavan) を中心にして、世界宣教大学院・教会成長研修所 (School of World Mission and Institute for Church Growth) を設立し、人類学をベースにした海外宣教戦略を展開したのである。加えて1965年に、科学的な根拠に基づいて人間を考察する機関として、心理学大学院 (School of Psychology) を設立した。<sup>34</sup> これら一連の改革は、単に神学的な思索を深めた結果ではなく、実践的な当時の学術的成果を積極的に取り入れていったということができよう。

彼ら第二世代は、第一世代よりもむしろストレートに「新しい福音主義」の主張

(社会に対して開かれた存在を目指す) へ向かっていったと言えよう。言い換えれば、彼ら第二世代は、現実生活からの必要に応える形で神学を捉えていこうとする姿勢を育みつつあったということである。これは森が語るリベラル派の神学思想の特徴にも合致する傾向である。<sup>35</sup>

では彼らはリベラルに傾倒していったのか？しかし彼らの聖書に対する主張は、明らかに「聖書は神の言葉」という超自然のものをそのまま受け入れようとする姿勢を崩していない。つまり彼ら第二世代は、根本主義を脱していく具体的な言動をし始めたと言えよう。

高等批評の世界にどっぷりと浸かって、自らの立脚するところ(神の言葉としての聖書)をないがしろにしたのではない。かといって単に自らの神学的立場を敷衍することで、社会を聖書から規定しようとしたのでもない。その微妙なさじ加減を斟酌できるような寛容さ、包括力が確かに備わっていたとは言いがたいが、少なくとも育まれつつあったと言うことはできよう。

以上を踏まえて第二世代を評するなら、プリンストン神学の復興でもなく、根本主義でもない、増してリベラルでもない、まさに「新しいタイプの福音主義者」ということになるだろう。

## 7. 「新しい福音主義」とは何だったのか

20世紀初頭から登場してきた根本主義(Fundamentalism)は、スコープス裁判などを経て偏狭で頑なな一派というイメージをメインライン・キリスト教界に持たれてしまった。そのようなレッテルを払拭すべく立ち上がったのが「新しい福音主義」たちである。ところが今までの考察から見えてきたように、彼らは決して一枚岩ではなかった。そしてフラー神学校という教育機関内で起こった分裂騒動は、第一世代と第二世代との相違を際立たせ、さらに福音主義全体のあり方を振り返らせることとなった。

「新しい福音主義」の第一世代は、彼らの力でディスペンセーションリズムを切り離した。そして社会に向かって関心を広げ、社会問題にも積極的に関わっていこうとした。しかし惜しむらくは、その関わり方は「寛容」という言葉に縛られ、さらに「聖書は無謬である」という神学に制限されたものであったということである。この縛りと制限の中で、何とか伝統的な聖書理解を正当なものとして守っていかなければならなかったのである。この使命を果たすために、「新しい福音主義」の第一世代は

奇妙な「ねじれ」を生じさせてしまった。それは聖書無謬の教理を、奇想天外な理屈を用いてでも延命させようとする試みと解することができる。

例えば、リンゼルはマルコ福音書とマタイ・ルカ福音書における「ペテロの否定」記事を取り上げ、その記述の矛盾を論理的に説明しようとしている。

**マルコ14：30** イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。あなたは、きょう、今夜、鶏が二度鳴く前に、わたしを知らないと言います。」

**マタイ26：34** イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度、わたしを知らないと言います。」

リンゼルは確かに一見矛盾に見えることを認める。しかしこれを鶏が鳴く前に三度、まず「知らない」とペテロは言い、一度鶏が鳴いたあとにもう三度ペテロは「知らない」と言う。その後で鶏が二度目に鳴いた、と説明するのである。だからペテロは合計六回も知らないと実際は言っていたのだ、ということになる。<sup>36</sup>

この説明に対して、ジェウエットは次のように語る。

「このようなアプローチは、『神の働きなき預言者のねじれ』の一つの例であって、これをなんとか調和させようと虚しい努力を生じさせるだけである。(中略)これ(ペテロが六回否定したという説明)など、長きに渡る悲しい議論の最たるものである。」<sup>37</sup>

そしてこの「ねじれ」に陥らないために、ジェウエットは端的にこう語っている。

「私たちは次のことを明白に意識しなければならない。それは、神の働きと権威に関する適切な教理は、聖書批評学のもたらしたものを考慮しなければならないということである。」<sup>38</sup>

これは、高等批評を素直に認めつつ、考慮しつつ、その中で改めて聖書に向き合う方が、奇妙な「ねじれ」を生じさせないという意味で、結果的に福音主義にとって有効ではないかということになる。しかし歴史的には、この種の「ねじれ」が数多く存在し、延命措置の有効な手段として持ち運ばれていったのである。<sup>39</sup>

ところがよく考えてみると、彼らが生み出した「ねじれ」は、皮肉なことに彼らの論理を破壊する結果を生み出していることになる。例えば、上記のペテロの記事だが、福音書には「あなたは三度私を知らないと言う」とある。それを実は六度否定したのだ、と説明することは、明らかに「聖書無謬」の原則に反している。聖書は神の言葉である、と提示していながら、その神が「三度」と語っているのに、これを「六度」と言い換えることは、彼らの前提条件に抵触する帰結であろうし、「聖書の無謬

性、真理性を実証する方法を聖書そのものに求める」というプリンストン神学の姿勢にも相容れないものとなっている。

このような「ねじれ」を生み出すということは、第一世代は明らかに根本主義を引きずっていたということである。プリンストン神学、特に聖書の権威が高く保たれていた時代をもう一度復興したいと思うあまり、策を弄し、強引な解釈を断行してしまったと言えるだろう。上述したように、彼らは好戦的な雰囲気を出さないように心がけているが、その本質において頑なさは拭い去れていない。そういった意味で、彼ら第一世代は目指すべき目標を掲げはしたが、そこに到達する術を持たなかったとも言えよう。

一方、第二世代についてはどうであろうか。

アメリカはカリフォルニア州南部のコスタ・メサにあるカルバリー・チャペルの主任牧師、チャック・スミス (Chuck Smith) が、リンゼルの『聖書のための戦い』短縮版に補遺「近代主義、根本主義、新しい福音主義、そして聖書の無謬性」を寄稿しており、その中で彼は次のように語っている。

「福音主義—根本主義者 (evangelicals-fundamentalist) である牧師たちの息子は、よりリベラルな新しい福音主義 (New Evangelicalism) を創り出す決心をしてしまった。彼らは分水嶺であった聖書の無謬性を保持せず、むしろ超教派的に、そして教会間の外交官になってしまった。彼らはフランシス・シェーファーが『本当の真理 (true truth)』と呼んだ事柄を大切にするよりも、むしろ積極的、包括的なあり方を好んだのである。」<sup>40</sup>

1948年にオッケンガが「新しい福音主義」を提唱したというのが歴史的な事実であり、スミスの分析は歴史的には誤りであるが、内容的には皮肉にも正鵠を射ている。ヘンリー、そしてオッケンガらは、根本主義のあり方に疑義を抱き始めた世代である。マースデンは彼らを「新しい福音主義の第一世代とは、根本主義の第二世代である」と述べている。<sup>41</sup>

つまりスミスが掲げる「福音主義—根本主義」者こそ、「新しい福音主義」を提唱した中心勢力であり、19世紀のオールド・プリンストン神学の復興を願い、先達の意志を継ぐ者として自らを位置づけた。しかし彼らが目指した世界への扉を実際に大きく開いたのは、スミスが語る息子たちだったのである。しかも内部での分裂という、1920年代から30年代にかけての根本主義時代に起こっていたことをリフレインさせるような出来事を通しての変化であった。

スミスが語るとおり、実質的に「新しい」福音主義を生み出したのは、息子たち (第二世代) だったのである。しかし彼ら第二世代も、60年以降の歴史を見るにつ

け、決して福音派を束ねるような勢力とはなっていない。<sup>42</sup>スミスが言う「外交官になった」というのは、これまた痛烈な皮肉となってその後の彼らの動向を的確に表現していると言えよう。

フラー神学校でオッケンガの後に二代目学長となったカーネルの論文が、1958年に二度、『クリスチャン・センチュリー』誌に採り上げられた。同誌は、リベラル的な信仰理解に立つ当時のメインライン系キリスト教会でよく読まれていた雑誌である。その時の書評に書かれたフレーズが「洗練された根本主義者」「根本主義者のルネッサンス」であった。彼の論文はリベラル陣営にも評価されたが、カーネル自身はあくまでも「根本主義者」と評されたのである。本稿のここまでの考察を振り返ると、『クリスチャン・センチュリー』誌の評価は的確なものだったといえることができる。<sup>43</sup>

第一世代が願ったオールド・プリンストン神学の復興という事柄を加味して考えるなら、彼らは聖書理解を巡る問題に曝されたとき、根本主義的特徴をさらけ出してしまったということになる。そういった意味で彼らはやはり根本主義者であった。しかも好戦的な部分を意識的に排除した根本主義者（Fundamentalist）であろう。私は彼らを「刷新された根本主義者（Renewal Fundamentalist）」と定義したい。

そして第二世代は、第一世代が思い描いたものを実現に向けて一歩踏み込んだ世代であると言える。聖書理解においては基本的な枠を持ちつつも、そこに社会の現実に向き合えるだけの耐性を兼ね備えた「新しい（New）」福音主義を構築しようと現実変化を起こしていったと言えるだろう。そういった意味では「新しい福音主義」は、彼らにこそふさわしい名称となったのである。

ここまでの論考をまとめると、この二つの世代の区分けは、福音主義の教理として伝統的に存在していた「聖書は神の言葉である」というフレーズをどう捉えるか、によってその具体性を持つと言える。第一世代は、プリンストン神学の聖書解釈を高等批評後の世界においても適応させようとして、矛盾を露呈した。第二世代は高等批評に心を開きつつも福音主義者であろうとし、バランス感覚が必要とされる中を懸命に生きようとしたのである。しかしバランス感覚を保とうと努力している様は、他の福音主義者にあまり理解されず、結果として福音主義陣営をまとめ上げる存在とはなり得なかったのである。

## 8. 結論

「新しい福音主義」は、60年代に入ると第一世代である「刷新された根本主義」と第二世代である「新しい福音主義」との対立が顕在化してきた。両者の相違点は、聖書理解における高等批評への向き合い方、そして社会との距離感である。これらに歩

み寄ろうという「願い」を持った世代と、実際に一步「歩み寄った」世代の違いである。

「新しい福音主義」とは、言うなれば根本主義と評されていた人々の内部刷新運動である。必然的に彼らは自らが信じ行ってきた事柄を吟味することになる。人々に受け入れられるような「穏健な (moderate)」姿勢を持ちたいと願った人々から「新しい福音主義」は始まった。しかし実際に刷新を行っていく過程は、「願い」というレベルを超えていく。そして高等批評に心を開き、社会との接点を求めるその過程の中で、自らの聖書理解を再構築していくという作業に向き合わなければならなくなっていくのであった。この推移に、筆者は歴史的存としての福音主義者を見出す。

「新しい福音主義」の第一世代は、高等批評に対して共に戦ったり、その戦いを主導しているメーチェンのような人物によって薫陶を受けてきた。しかし次の世代は、第一世代が穏健さを持ちたいと願い、葛藤する中で育ってくることとなった。つまり葛藤を間接的に担ってきた世代である。

「新しい福音主義」とは、「オールド・プリンストン」の復興を求めつつ、結果的に彼らが願っていたこととは異なる「新しい」福音主義の流れを導いたのである。しかしその代償は大きかったと言わなければならない。「新しい福音主義」内部の分裂はもとより、福音主義全体をまとめ上げることがもはや不可能になってしまったのである。それくらい聖書理解に関しては、諸説が飛び交うこととなり、その流れを押し留めるものはなくなっていったのである。そして70年代以降のパラ・チャーチ化の時代を迎えることとなる。

「新しい福音主義」が歴史的に果たした役割は、聖書理解という観点から見ると、次のように結論づけることができるだろう。

①「新しい福音主義」は、根本主義の堅くなさを捨て去り、社会に対して寛容で開かれた信仰姿勢を持ちたいと願った人々によって起こされた内部刷新運動である。しかし第一世代は、聖書の無謬性に関しては根本主義の堅くなさを捨てきることは出来なかった。

②第二世代は、聖書理解においては「聖書は神の言葉である」という基本的な枠を持ちつつも、そこに社会の現実に向き合えるだけの耐性を兼ね備えた「新しい (New)」福音主義を構築しようと、現実的に変化を起こしていった。しかしそれは高等批評を受け入れることを意味しており、第一世代との間に分裂を生み出したと同時に、その後の福音主義者をまとめ上げる可能性を失ってしまうことになった。

- ③「新しい福音主義」は、根本主義の堅くなさを払拭することはできた。しかしパラ・チャーチ化を通して福音主義の統一性を失わせる原因ともなった。この功罪を併せ持つ1940年代後半から1970年代までの刷新運動が「新しい福音主義」である。

## 注

- 1 特にこの頑なさを意識させられたのが、1925年の「スコープス裁判」である。これは進化論を教えることを禁止した法律があるにも関わらず、理科の教師スコープスがこの禁を破ったため起こった裁判である。しかし実質は「果たしてこの世は聖書の天地創造の記事とおりにできたのか」をめぐる対立となってしまった。進化論反対派は最終的に勝利するが、彼らの時代錯誤的な世界観が全米に知れ渡り、この裁判の結果、彼らの勢力は衰えていった。
- 2 George M. Marsden, *Reforming Fundamentalism: Fuller Seminary and the New Evangelicalism*, William B. Eerdmans, 1987, p.45.
- 3 Harold J Ockenga, foreword to Harold Lindsell's book *The Battle for the Bible* (Zondervan, 1976), p. ii.; Douglas A. Sweeney, *The American Evangelical Story*, Baker Academic, 2005, p.172.
- 4 デイスペンセーションナリズムとは、聖書に出てくる年代をそのまま加算し、天地創造から現代までを救済史の観点から七つに区分する考え方である。歴史的に見ると、終末意識の高まりと共に、この考え方が人々の心を捉えてきたことがわかる。
- 5 森 孝一「アメリカにおけるファンダメンタリズムの歴史」『基督研究』、第46巻（1985）、第2号、210頁参照。
- 6 Carl Henry, *The Uneasy Conscience of Modern Fundamentalism* (WM. B. Eerdmans, 1947), p.66.  
カール・ヘンリー『キリスト者の社会的責任－福音主義の社会倫理－』、いのちのことは社、1980年、30頁。原著は1971年に書かれたもの。
- 7 Billy Graham to Harold Lindsell 1.25.1955 letter See Marsden, *Reforming Fundamentalism*, p. 158.; Carl Henry "Why 'Christianity Today?'" in: *Christianity Today* (10. 15. 1956.) pp 20-21.
- 8 Marsden, *Reforming Fundamentalism*, p.207.
- 9 Ibid.
- 10 マースデンも、別の箇所で、「第一世代」「第二世代」という用語を用いている (*Reforming Fundamentalism*, p 231.)。しかし彼は「進歩的 (progressive)」「保守的 (conservative)」といった表現を主に用いている。筆者はマースデンのような分け方は、それが全く別物と言った印象を与えてしまうため、むしろ彼が便宜上用いた「第一世代」「第二世代」をそのまま用いて考察を進めることとする。両世代は、「聖書は神の言葉」という基盤に立ちつつも、その漸進的な発展の中で異なる強調点を持つに至ったととらえるべきと筆者は考えているからである。
- 11 Robert B. Fowler, *A New Engagement: evangelical political thought, 1966-1976*, Eerdmans, 1982, Chap.5.
- 12 Sweeney, *The American Evangelical Story*, p.178.



- 13 Harold Lindsell, *The Battle for The Bible Defending the Inerrancy of Scripture: Abridged Edition*, calvary Chapel, 2008, p.26.
- 14 *Ibid.*
- 15 *Ibid*, p.156.
- 16 Kenneth Kantzer, "Evangelicals and the Inerrancy Question" in: Kenneth S. Kantzer, *Evangelical Roots A Tribute to Wilbur Smith*, (Thomas Nelson Inc. 1978), p.100.
- 17 Lindsell, "Another Battle About Bible" in: Kenneth S. Kantzer, *Evangelical Roots*, p.77.
- 18 *Ibid*, p.82.
- 19 Lindsell, *The Battle for The Bible*, p.29.
- 「誤りがない」と語る場合の言葉は二通り存在する。歴史的に古いのは、**infallibility** である。これは「無謬性」と訳される。もう一つは **inerrancy** である。これは「無誤性」と訳される。両者の違いは、前者は英国宗教改革時代から用いられていた言葉で、後者は19世紀末の聖書批評学に対して、聖書の信憑性を守るために用いられた言葉である。両者に実質的な違いは見受けられないが、1920-30年台のファンダメンタリズム論争の時代では、**inerrancy** が通常は用いられるようになった（宇田進『総説現代福音主義神学』、いのちのことば社、2002年）。しかし「新しい福音主義」たちは、**infallibility** をそのまま用いている。C. マッキンタイアらは、この言葉の違いを採り上げて、オッケンガらを非難している。
- 20 小原克博「キリスト教と原理主義」（小原克博、中田考、手島勲矢）『原理主義から世界の動きが見える キリスト教・イスラーム・ユダヤ教の真実と虚像』、PHP 新書、2006年、118頁。
- 21 John G. Stackhouse, *Evangelical Landscapes: -Facing Critical Issues of the Day*, Baker Academic, 2002, p.52.
- 22 Marsden, *Understanding Fundamentalism and Evangelicalism*, Wm. Eerdmans, 1991, p. 9.
- 23 David Hubbard, William S. Lasor, and Frederic WM. Bush, *Old Testament Survey The Message, From, and Background of The Old Testament*, Wm Eerdmans, 1982, p.1.
- 24 *Ibid*, p.4.
- 25 Daniel P. Fuller, *The Unity of The Bible*, Zondervan Publishing House, 1992, p.xvii.
- 26 Paul K. Jewett, *God, Creation, and Revelation : A Neo-Evangelical Theology*, William B. Eerdmans, 1991, p.125.
- 27 デヴィッド・アラン・ハバード『ティンデル聖書註解 ヨエル書、アモス書』、いのちのことば社、2008年、117頁。原著は1989年に書かれたもの。
- 28 Jewett, *God, Creation, and Revelation*, p.128.
- 29 ハバード『ヨエル書、アモス書』、pp.116-117。
- 30 Fuller, *The Unity of The Bible*, pp.22-24.
- 31 Jewett, *God, Creation, and Revelation*, p.125.

- 32 Hubbard, *Old Testament Survey* . p.6.
- 33 *Ibid*, p.7.
- 34 Marsden, *Reforming Fundamentalism*, pp.237 – 242.
- 35 森「アメリカにおけるファンダメンタリズムの歴史」、203頁参照。
- 36 Lindsell, *The Battle for The Bible*, pp.115-116.
- 37 Jewett, *God, Creation, and Revelation*, p.134.
- 38 *Ibid*.
- 39 リンゼルの『聖書のための戦い』は、こういった「ねじれ」が少なくとも10箇所以上は掲載されている。そのどれもが、聖書の記述に対して現代の常識から判断するに、明らかにおかしいと思われる箇所である。
- 40 Chuck Smith, “Modernism, Fundamentalism, New Evangelicalism, and Biblical Inerrancy” in Lindsell, *The Battle for The Bible*, p.171.
- 41 Marsden, *Reforming Fundamentalism*, p 231.
- 42 「福音派」という用語は、教派の垣根を越えてパラ・チャーチ化した保守的信仰を持った人々の集団を説明する概念として用いている。詳細は、森孝一の著作（『宗教から読むアメリカ』、講談社メチエ、1996年）を参照した。
- 43 *Ibid*, p.187.

（本稿は2008年9月に行われた第56回日本基督教学会学術大会にて発表した原稿に加筆・修正したものである）